

チ  
ガ  
子

海  
辺  
の



高校に進学した僕は、中学と変わらず一人ぼっち。誰とも喋らない。

僕は無趣味で、面白い芸など出来ない。テレビを見る暇がないので、テレビの話題についていけない。運動神経は鈍い。勉強が凄く出来る訳でもない。僕にはクラスメイトと話すべき共通の話題など何も無いのだ。そんな僕に関わろうとするなら、それは物好きか暇人の類いだらう。

僕の日常には、家庭の事情があちこちに影を落としている。例えばスマホを持っていない。スマホがないからLINEが使えない。LINEを通じて友達とメッセージをやり取りすることが出来ない。うちの経済事情がゆえに、それはどうしようもないことの一つだ。

高校は、家から近い公立校というだけの理由で県立湯河原南高校を選んだ。授業料無料。歩いて行けるから定期代もかからない。名門校というほどではないけれど、一応、進学校。勉強は頑張った。

湯河原南高でも僕は、積極的に友達を作ろうとしなかった。相変わらずLINE断絶地帯だし、友達との話題づくりのための努力なんかするくらいなら、父ちゃんの仕事の手伝いをした方が儲かって嬉しい。

湯河原南高は相模灘に面している。それは知っていた。地元だから。湯河原南高の教室からは広く大きく海が見える。この風景は新鮮だ。教室からの風景なんて入学しないと実際に見ることは出来ない。

授業に飽きると僕は海を眺めた。真昼の相模灘は南天の太陽を受けて銀色に輝く。学校の裏手は階段状になったコンクリート造りの堤防になっている。その階段堤防も知っていたが、あまり暇でない僕は、そこに行ったことは少ない。第一線を引退したおじさん達が、平日でも昼間から釣り糸を垂れていた。

その日、いつものように海を眺めていると、階段堤防に猫がいることに気づいた。白い猫。釣り人から何かを貰っていた。

猫に興味を引かれて僕は、昼休み、階段堤防に出てみた。釣り人は、狙いの獲物が釣れるとバケツに入れ、狙いでない小魚が釣れると猫に与えていた。その猫は、そんな小魚でも、うしやうしやと嬉しそうに食べていた。猫は真つ白だった。「にゃあ」と呼ぶと寄ってきた。人慣れしている。背中を撫でるとごつごつとしていた。野良生活の厳しさが体つきに現れている。尻尾は長くクランク状に折れている。お尻を見ると玉はない。雌だ。野良でこんなになつこい猫は珍しい。釣り人達と交流があるからだろう。

「ごめんよ。僕は食べ物を持っていないんだ」

その猫は瞳の色が変わっていた。右がブルー、左が茶色のオッド・アイ。瞳の色が左右で違うので、僕はその猫を「チガ子」と呼ぶことにした。

……

翌日の昼休み、僕は弁当からマグロの角煮を食べ残しておいて、階段堤防に向かった。

いつものようにそこには、静かに波の寄せる相模灘が広がっていた。高齢の釣り人が時折、沖に向けて仕掛けを投げていた。

「チガ子」

呼んでみると、どこからともなくチガ子がやって来た。僕の声覚えてくれたようだ。

僕は階段堤防に腰を下ろし弁当箱を開いた。

「今日は角煮があるぞ、マグロは好きかな？」

階段堤防に弁当箱の蓋を置いて、角煮をチガ子に差し出す。チガ子は一瞬、不思議そうな顔をしたが、やがてそれが何であるか察したらしく、目付きを変え、角煮に食い付いた。

「うちは貧乏だから、肉はあまり食べられない。でも角煮が君の好みに合って良かったよ」

時々首を振り、チガ子は角煮を捌くようにして食べた。角煮を食べ終えるとチガ子は僕の膝に乗ってきた。よほど嬉しかったらしい。

チガ子は僕の太ももを、ゆっくりと押し始めた。僕は驚いた。これが「ミルキング」か。リラックスすると猫は、前足で足踏みするような動作をする。母猫から母乳を貰っていた頃を思い出しているのだ。YouTubeで見たことはあったけれど、体験するのは初めて。

「チガ子、明日も来るよ。何か欲しいものはある？」

「ミルク」

「そうかミルクか」

はい？

チガ子が喋った？

「チガ子喋れるのか？だったらもつと話がしたい、何か言ってくれないか？」  
「……」

学校の帰りにスーパーに寄って、特売になっていた小アジをまとめ買いする。それと牛乳。いつものリットル入りではなく、常温保存可能の小さいやつ。明日チガ子に持って行こう。しかし猫って本当にミルクなんて欲しがるものなのか？チガ子、飲んでくれるかな？

うちは両親が病気で思うように体が動かないため、たいていは僕が買い物に行く。稀に母ちゃんの体調が良い時には、母ちゃんも単独で買い物に行く。そうすると期せずして牛乳が二パック冷蔵庫を占拠してしまったりするが、翌日の買い物で僕が調節すれば済むこと。大した問題じゃない。母ちゃんが買い物に行くと、チヨコレートやおせんべいを買って来てくれる。

僕の両親は二人とも二級の精神障害者。精神病というのは、一言で言うと、脳という臓器の故障。脾臓が故障してインスリンが出なくなれば糖尿病に、腎臓が故障して血液の濾過ができなくなれば腎臓病に、心臓が故障して血液がうまく循環させられなくなれば心臓病になる。それらと理屈は同じだ。脳という臓器が故障すると、脳内の神経伝達物質という奴が、過剰になったり不足したりして、精神病になる。そして、その精神病が原因で日常生活に支障が出る状態、それが精神障害。

精神障害というのは、身体障害や知的障害と違って、あきらかに見た目で分かるということがない。そ

のため、なかなかその苦しさが理解されない。父ちゃんが言うには「三晩徹夜明けプラスおつかない上司から罵声を浴びせられた後、大声で『申し訳ございませんでした』と叫びながら土下座一〇回」、それが、精神障害の二級の「割と具合のよい時の気分」だそうだ。

両親から僕に病気が遺伝しなかったのは運が良かった。でもそれはそんなに珍しいことではない。そうはいっても日常生活への影響は大きい。暮らしのあちこちに両親の病気が顔を出す。二人とも自分の体の切り盛りで精一杯なので、掃除、洗濯、炊事など、僕が行うことが多い。高校進学にあたっては僕が、学校に提出する書類の、そのほとんどを自分で書いた。

父ちゃんは鬱病の、治りにくくて特に重いやつ。父ちゃんは湯河原出身の小田原育ち。平塚の大学に四年通って、卒業と同時に国家公務員になり、霞ヶ関某省に入った。学生時代の父ちゃんは、未来予想図を、こう描いた。「国家公務員⇨堅い職業⇨倒産しない⇨五時になったら帰宅」。真っ先に否定されたのは最後の一つだ。五時に帰るというのは霞ヶ関では有り得ない。霞が関は不夜城。終電を逃すことも珍しくない。堅い職業というものは、両手両足、一挙手一投足に至るまで、法律や通達という、ある種の重いおもりを背負いながら働くということを意味する。おもりはそれだけではない。省庁間の合意事項という、細かく込み入った取り決めもある。プロジェクトを進めれば、あつという間に合意書類が山をなす。確かに倒産はしないだろう。けれど激務。エリート達の出世競争が激しくて、失敗をすると（出世をしたくてもしようがない）上司からもの凄いプレッシャーを受ける。まだパワーハラスメントという言葉が一般的になる前のことだ。

そんな霞ヶ関で父ちゃんが任された仕事は、当時まだ黎明期だった省庁ホームページの、担当課ページの制作および更新。複雑なルールが定められ、かつ、実務的にはWindowsのメモ帳でHTMLタグを手入力しなければならなかった。もともと文系だった父ちゃんは、苦勞してHTMLタグを習得し、毎日遅くまでホームページと格闘していた。しばしば父ちゃんは更新に失敗したり、誤字脱字などのミスをしでかした。そしてその都度、直属の上司から酷く叱責された。そんな毎日を通じているうちに、父ちゃんは鬱病を患うようになった。父ちゃんは毎日抗鬱剤を飲みながら、精一杯頑張って霞ヶ関に通った。

ある夜、残業中にふらりとトイレに向かった父ちゃんは、無意識のうちに手首を切っていた。四階男子

トイレが血の海。発見があと一分遅ければ父ちゃんは死んでいた（＝僕も生まれていない）。救急搬送。遺書はなく、自殺の原因は不明とされた。後で分かったことだが、直接的な自殺の原因があったというより、鬱病の希死念慮というものだったらしい。父ちゃんは一命を取り留めた後、救急センターから精神病院に転院した。

一方、湯河原出身湯河原育ちの母ちゃんの病気は、統合失調症。現代美術家や有名シンガーソングライターなど、この病気は、しばしば芸術系の才能に恵まれた人を悩ませている。母ちゃんも若い頃は美大生だった。今でもメモ帳に落書きなどすると、幻惑的な抽象画になっているのだが、「こんな遊び」と言つて、母ちゃんはそれをポイポイと捨ててしまう。

美大受験というのとはとても厳しく、母ちゃんは高校二年生から平塚のアトリエに通つていた。そして、トレーニングのための絵を数えきれないほど描いた。それは楽しい作業ではなかった。苦しい作業だった。だが美大合格の為に母ちゃんは頑張った。アトリエに通つていた頃から何か違和感のようなものは感じていたらしいのだが、その違和感の正体は多分、ストレスによる疲労だろうと、母ちゃんは思つていた。

母ちゃんは「美大に入れば好きな絵が自由に描けるようになる、それまでの辛抱だ」と、歯を食いしばつて毎日、描きたくもない「トレーニングのための絵」を描きに描きまくった。

そして母ちゃんは晴れて美大に現役合格した。湯河原からの通学は無理と言うことで、下宿を埼玉の所沢に決めた。東京の人は笑うかもしれないけれど、湯河原から見たら、所沢は「大都会」「都心」、もう「東京の一部」なのだ。憧れの都市生活。心躍らせて母ちゃんは、美大の門をくぐった。そこには無限の自由がある、と、母ちゃんは夢を広げた。たが美大の授業が始まってみると、そうではなかった。自由どころか毎日が課題の嵐。自由に絵を描く時間も余裕も全く無くなつてしまった。母ちゃんは、絶望しながらも課題をこなした。

ある日、下宿先のマンションで、三角錐とりんごをデッサンしていると、りんごから虫が這い出して来るのが見えた。そして背後から首を絞める誰かが居た……それらは統合失調症の幻覚だったのだが……マンションのベランダから助けを求め、通行人が警察に通報。警察から精神科へ直行。入院。

全文収録の冊子版は「飯島意匠通販部」でお求めになれます。

<https://iijiman.stores.jp/>